

明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可(毎月一回廿五日發行)
明治四十一年二月廿五日發行

銀
鈴

第二十九號

社告

本社は今般左の通り分擔を定め候。
爾今書信の發送等は此區別に依られ度候。

石見邑智郡田所村下田所 銀鈴社事業部

右は社友加盟、購讀申込、廣告に關する事件
を取扱ふ。

石見邑智郡田所村下龜谷 銀鈴社編輯部

右は社友および一般讀者の寄稿、新刊雜誌類
の寄贈等編輯一切に關する事件を取扱ふ。

二月二十五日

銀鈴社

銀鈴

第廿九號

明治四十年二月廿五日發行
梅花號

松江行日記

翠 瀨

一月三十一日。金曜。

公務を帯びての旅行、午前八時出發す。奥原碧雲君の「島根縣名勝誌」、月の「早稻田文學」、新約全書等を携へぬ。祖式に一泊、宿舍の陋勝ふべからず。この日、風雨強く、暮れて霰降ること頻りなり。

(一)

(二) 二月一日。土曜。

風寒けれど天麗なり。徒歩して安濃郡朝山まで到る。午后三時を過ぎぬ。こゝより車に乗る、輕駛甚だ快なり。全く日暮れて今市に着す。同行あり、牛肉を煮て豪飲、夜を更かしぬ。

二日。日曜。

庄原より汽船に乗る。風浪穩かならず。談笑のうちに船は、走せて嫁ヶ島のはどりに到る、景は小なれども愛すべし。吟心漸やく動く。棧橋を上り旅館に投ず。午后四時。

三日。月曜。

午前九時、地方裁判所に出頭、用務を終へて歸れば已に正午なり。午后三時、松陽新報社

に錦織錦齋子氏を訪ひ、談數刻にして辞す。新報社を出で、白瀉本町に至り、山陰新聞社を叩きて丸見鴻水と會見す、清話興に入らんとして辞す。

四日。火曜。

朝、城山公園に遊ぶ。茗を嚙りて名物櫻餅を賞す、風味忘る可らず。午後、汽船によりて美保關に赴く。美保神社參詣の人織るが如く、町内の雜沓甚し。殊に厭ふべきは、三更尙ほ止まぬ絃聲歌聲の騷音なり。

五日。水曜。

午後九時美保關を立ち、伯耆の境を経て、午後二時米子に着く。前夜眠り成らざりしたため

(三)

(四)

睡魔頻りに襲ふ、追はんとして得ず遂に夢境に入る。覺むる時、下婢燈を持ち來る、夕餐を終り、暫らく讀書す。

六日。木曜。

午前十時安來に向ふ、安來にて書店を獵り、新刊の雜誌を求めて去る。

七日。金曜。

再び松江に復る。友を大橋館に訪ひ。歸途有田書店にて書籍を買ふ。

八日。土曜。

午前八時、友M氏と共に松江を立ち、庄原に向ふ。他に四五の同行あり。簸川郡小田の小旅館に投ず。

九日。日曜。

M氏外一人と、日本海の壯大なる波濤を賞しつゝ、緩行、田儀を過ぎて朝山に込る。雪あり。行路頗る艱む。太田にて一泊。

十日。月曜。

太田を發し、夕方川本に着す。身心全く疲勞せり。

十一日。紀元節。

いたく寝過しぬ。匆惶、装を調へて發す。山又山、疲憊と倦怠と、今は早や堪ふべからず。されども、今日は旅行を終る日なり、歡ばしきかな。老いたる父母、なつかしの書齋、いかに我をや待つらむ。午后五時歸宅。

(五)

(六)

短詩八首

月 森 神 來

友戀し田川のあたりあやめ咲き紫の雨靜にふる時

棕櫚の葉に風泣く秋の雨の夜はものけ怖ぢて君はありける

また今日も小女屠らむ酒もてて獸の王の高き聲かな

わが膽を試むといひ血に逸る若人は來ぬ妖の

窟に

「われ死なむ」といへば君も「後れ」と誓ひぬ
秋の月の磯邊に

法會の夜善女ひとりに亡き君のおもかげしの
び涙しぬわれ

あな光あまりにつよし眩すと妖怪が引くくろ
雲の幕

(七)

妖の群われを捉ふと軒下をめぐると高き雨滴
をさく

(八)

雜吟

風呂吹の冷ひて詮なき朱椀哉 佛丈

俳佛に風呂吹なんど供へけり

撒きたるが如き小島や群千鳥

寒月や蠣殻光る濱庇 雨翠

小走りに謠ふ若衆や冬の月

蘆の根に潮の光りや冬の月

寒月や焼けたるあとの板囲ひ

門を入れば石臼に冬の日あたる

冬の日は蘆にうすれて水さむし

冬の日の時雨れんとして暮る也

大根を引くや漁村の女勝

(九)

復照青苔上

森脇桃村

利鎌もて彌いぢやに生ひたる醜草しこぐさを茹れど云へども

「それはのたまへども」

おどろまき百千せひちの蛇は聴き取れぬあまた名を

呼びおびやかかしぬれ

坂本笑風

君に逢ふ清さおもひをねがはくば日記にきにとい

めむ凶鳥まのどりよ去れ

咲くや花夕さすらひのみ裳その香にわが戀衣あを青

の彩織あやれ

失名氏

(十)

君を見て早鐘はやかねすなり心こゝろの臓ぐらうわゝひと時も今は
得堪とくたへじ

○ 立石洲洋

初春はつしゅんの風はうれひの君と我がさびしき額かみかぶとそ
よ吹ふきてゆく
眠る山ま圓まき峯みねはも春の風吹けば黄金こがねの霧も生
むかな

○ 河野翠漱

嫁よめが島波しまなみの遠音とほねを琴この柱はしらに懸かけて彈ひくやとま
たかへり見ぬ

黄きに濁にごる水みづも機關きくわんのとどろきも汝なを見る刹せつ那な
安やすし船ふねゆく(以上松江紀行の歌の内)

○ 菅原紅雨

(一一)

夢ゆめにわが胸むねにしほめる一輪いつりんの花はなに泣なくなる黒
き蝶ちょう見ぬ

さな云いひを毒どくの酒さけ呑のみみ亂ま酔よに幾日いくにちを消けすたは
れ男おとこと

木き枯かは虚うつろに眠ねれる小兎こうの夢ゆめおどろかし去さりぬ
地の果はた

冷ひやかなる手てもて汝なが燃もゆ心臓しんざうを屠ほり捨すてむと
我わがけ謀はかりりぬ

時ときとして心こゝろの奥おくのこきもの君きみが名なよぶをうれ
はしむかな

薔薇さうびの香かほはのにはひぬむかし人ひとわれに泣なか
むとしのび來こしかや

(二一)

小曲一篇

井上翠紅

さめざめと枯木のなかに、
目の前のほろびをおもひ
泣きぬれぬ、冬の夜の雨。

されど今、わが一身は、

暖く將たなつかしき

抱擁の君がみ胸に。

▲寄贈新刊

△朝虹(四の二)△三餘の友△明
ボノ△かすみ△五加木(二の六)△山鳩(四十六)△
藻の花(四の九)△ウキジロ(五の三)△浪花(四の二)
△大和文藝

▲社告

△本社は別項廣告する通り事業部
と編輯部と截然區別を設けたから、今後出版
其他會計に關する事件は下田所事業部、編輯
上の投稿及び新刊寄贈は凡て下龜谷編輯部へ
宛て、送付せられたい。此區別を混同せられ
ると取扱上相互に非常な不便を生ずるから、
篤く注意せられんことを望む。△前金切の諸
君は次の發行日より十日位前に拂込まれたい。

▲次號原稿

ペ切は三月十二日

銀鈴 三冊郵稅共拾參錢六冊全前金貳拾五錢
廣告料 一行拾錢 一頁壹圓 半頁前金六拾錢

明治四十一年二月廿三日印刷
明治四十一年二月廿五日發行 (銀鈴第廿九號)

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三一
發行兼編輯人 河野岩雄

島根縣飯石郡赤名村大字赤名八二一

印刷人 木村柳三郎
印刷所 赤名活版所

編輯所 石見國邑智郡 銀鈴社編輯部

發行所 石見國邑智郡 銀鈴社事業部
田所村下田所

明治卅七年一月十四日第三種郵
便物認可(每月一回廿五日發行)
明治四十一年二月廿五日發行